

ことばの「正確な」意味？

「放送のことば」の運用のめやすを考える部署にいと、ことばの「正確な」意味とは何かをめぐり、悩むことも少なくない。

去年の秋、御嶽山が噴火した際、「硫黄のにおい」という表現が話題になった。一部の放送局で「硫黄のようなにおいが立ちこめている」とリポートしたところ、ツイッターで「硫黄は無臭だ」という指摘があり、賛否両論、さまざまな意見がインターネットをにぎわしたのである。

確かに、原子番号16の元素としての「硫黄(S)」は無臭であり、「卵が腐ったような」と形容される独特のにおいは、厳密にいえば「硫化水素」のにおいということになる。しかし、一方で「硫黄」ということばは、必ずしも「元素」だけを意味しているわけではない。そもそも「いおう」とは、「ゆのあわ」「ゆあわ」からきたことばと考えれば、「硫黄のにおい」という表現が一概に間違いとも言い切れない。むしろ「硫化水素のにおい」という表現では、ピンと来ない人も多くいるのではないかと、という危惧もある。

学術上の定義、特に、科学の分野での定義は、しばしば日常的な慣用表現との間にあつれきを生み、混乱を引き起こす。放送で「白い水蒸気が上がっているのが見えた」などと言おうものなら、「『水蒸気』とは、水

(H₂O)が気化したものであり、目には見えない。学校で、そう習ったはず」という反応が必ずといっていいほど返ってくる。多くの国語辞書では、「水蒸気」を「水が気化したもの」という狭い意味だけではなく、広く「湯気」の意味でもとらえているが、後者はどちらかというやや地味に扱われがちだ。

極端な話をすれば、科学的、学術的には、確かに「タラバガニは、カニではない(ヤドカリの一種)」し、「スイカ・メロンは野菜(一年生植物)であって、果物ではない」のかもしれないが、それに凝り固まってしまうと、日常生活の上では、かなり不便なことになりそうだ。

要は、「場面によって、意味のとらえ方は、変わってくる」のであり、いついかなる場合でも科学的に正確、厳密であろうとすると、ことばの運用面での利便性、合理性は著しく低くなってしまふということだ。

「放送のことば」という点では、「間違いと言われかねない表現を避ける」ことは、もちろん不可欠だが、同時に「一般的な表現かどうか」という尺度も併せ持つ必要がある。その両方を満たすことは、ある意味、至難の「技」、いや「業」といってよい。

田中伊式(たなか いしき)